梅崎春生「桜島」再読

――紛い物として生き残ること

野中　潤

一、はじめに――紛い物としての「桜島」

桜島はじつは島ではない。四方を水域に囲まれている陸地を島と定義するならば、桜島は島とは言えない。錦江湾に浮かんでいるように見える桜島だが、南東部は大隅半島と地続きなのである。作中「大正初年の爆発によって海水になだれ入った溶岩」と記されているように、一九一四（大正３）年に御岳（おんたけ）の溶岩流が東側の海を埋め立て、島としての命脈を絶ってしまったのだ。小説「桜島」（1）に登場する村上兵曹（私）が、東側の鹿児島市から船で渡ったのも、島ならぬ島としての桜島である。村上兵曹が海路を利用したのは、坊津も枕崎も鹿児島半島にあるため、錦江湾をぐるりとまわりこんで鉄道の整備されていない東側の大隅半島から陸路で桜島へ赴くのは、あまりにも遠回りだからである。桜島が島だからではない。（2）

ナショナリズム、死、諸行無常などの語と連合関係を持つ「桜」と、なわばり、孤立、周縁などの語と連合関係を持つ「島」、この二つの喚起力のある語によって構成される小説言語としての「桜島」には、さまざまなメタファーとその錯綜を読み取ることができる。そしてその中心に、村上兵曹が生きていた大日本帝国を見いだすことも可能である。しかし、小説「桜島」の舞台である地政学的な存在としての桜島が、そもそも「地続きの島」という撞着語法によって表現され得る紛い物だということには十分に注意を払わなければならな

い。なぜならば、島ならぬ島としての桜島が、村上兵曹が所属する部隊の存在様態のアナロジーになっていて、そこに小説「桜島」の〝戦後文学〟としての意味を見いだすことができるからだ。

では、村上兵曹が所属する部隊の存在様態とは、いったい如何なるものなのだろうか。

二、「軍隊」の描かれ方について

小説「桜島」は、戦後派作家としての梅崎春生のデビュー作であり、「軍隊物」（山本健吉）(3)、「戦争小説」（本多秋五）(4)、「軍隊小説」（小島信夫）(5) などと名指されている。しかしながら、小説「桜島」における「軍隊」や「戦争」が、いったいどのような存在様態を持つのかということについては、これまで十分に問題にされてこなかった。とりわけ「軍隊」についての検討は不十分だった。

どこが不十分であるのか。従来の研究を瞥見しておこう。

たとえば戸塚麻子は、小説「桜島」において軍隊がどのように描かれているのかということについて、次のような指摘をしている。(6)

「私」の目で軍隊や世界を眺め、捉えるという方法が取られた「桜島」においては、〈日常〉は軍隊生活として新たに発見される。この視点は少なくとも敗戦直後の段階ではユニークなものであった。だが、この軍隊生活の〈日常〉は、当然のことではあるが軍隊外の世界の日常とは明らかに異質なものなのであった。異質な〈日常〉を、異常で特殊なもの、つまり「真空地帯」（野間宏）と受け止めるのではなく、異質ではあるが生活世界につながるような〈日常〉として捉えているところに、この作品の面白さがある。

戸塚は、九州の南西端にある特攻基地でありながら「まだ死なずにいられる場所」として描かれている坊津に対し、桜島は「必ず死ぬことを運命づけられた死の島」として「私」に意識されているという。「精神的極限状況の地」として「現世から隔絶された空間」、すなわち「死の島」である桜島に投げ込まれた途端に、「私」の新たな生活が〈戦争の中での日常〉として始まる。その一方で、耳のない妓や首吊り未遂をする老人などが生きる軍隊外の世界に、「イローニッシュに転倒された〈非日常的なもの〉が立ち現れる」という

のだ。このように、「娑婆と隔絶された異空間」としてのみ軍隊を捉えるのではなく、「生活世界の日常に連続したもの」として描き、ステレオタイプの軍隊批判を回避しているところに、「桜島」という小説の特質を看取している。

一方、日本軍の兵士として生きている村上兵曹（私）について、鶴岡征雄は次のように述べている。(7)

主人公は、念を押すまでもなく日本軍の兵士である。「軍人勅諭」の支配下に置かれている兵士であり、一応、職務をこなしているものの、その内面は死の恐怖に脅えている。兵隊としてひっぱりだされたことにも納得していない。もちろん召集は本人の意志とは関係なく強制であるから、納得できないといってみたところで抵抗の余地はない。言わば小説として成立が不可能と思われる地点に開かれた世界が「桜島」である。哀感や情緒といった、およそ軍隊とはかけ離れた詩情に満ちた感性によって描きだされた、軍国日本の終末ということができよう。

鶴岡は、村上兵曹が戦時下にあっても所与の状況に対して十分に自らを適応させることができず、常に憤りや懐疑を抱き続ける人物として描かれていると指摘している。村上兵曹とは、「軍人勅諭」的な世界からの隔たりの意識を生きる、「軍服は着用していても頭の中は市井人のまま」の人物だというのだ。村上兵曹が、「日本軍の兵士」でありながら「軍人勅諭を具現している典型的な人物」としての吉良兵曹長に対して強い違和感を覚えるのもそのためだ。鶴岡は、「軍隊」という語に対応する形で「軍人」という語を用い、そのうえで「軍国日本の終末」を読み取っている。

「軍人勅諭」的な世界を生きるべき「軍人」が、桜島という空間でどのような状況に置かれているのかということについては、高橋啓太が次のような指摘をしている。(8)

桜島基地では米軍の上陸地点はおろか、「味方」である日本軍が米軍にどのように対応するのかもよくわかっていない。死の到来を意味する米軍の姿も、目の前に現れてはいない。「暗号電報」によって外部からの情報がもたらされることで、初めて死の到来が予感されるのである。つまり、外部から情報を得ることでしか、自分たちの置かれた状況を認識することができないのだ。その意味で、桜島基地にいる兵隊たちは、「私」を含めて生死の狭間で宙吊り

にされていると言える。

外界から隔てられた「島」という環境の特質を、「情報」によって隔てられた内部と外部の関係に見ながら、「米軍」に対峙すべき存在としての「日本軍」および「桜島基地にいる兵隊たち」の存在を想定している。そして兵隊たちを生と死の狭間で宙吊りにされた存在と捉えることによって、「桜島」に紋切り型の軍隊批判を読み取ることは回避されている。イロニーを指摘する戸塚麻子や軍国日本の終末を指摘する鶴岡征雄と同じように、「軍隊物」などと呼ばれてきた「桜島」の内実を、一面的にならないように読み取ろうとしている点は評価できる。

しかし、これらの「桜島」論はいずれも、村上兵曹が所属する部隊の重要かつ基本的な特質を読み落としている。そこで、「軍隊」とか「兵隊」と呼ぶことによって捨象されてきたものに改めてまなざしを注ぐことによって、「桜島」の読みを更新しなくてはならない。

三、兵曹のいる軍隊

それではいったい、「軍隊」とか「兵隊」と呼称してしまった途端に捨象されてしまうものとは何だろうか。

桜島で従軍している「私」の階級は「兵曹」である。陸上で勤務しているが、「兵曹」は海軍の下士官である。「私」すなわち村上兵曹が、「海軍暗号書」で翻訳された転属命令に従って坊津から桜島へ向かう途中で出会った「坊津の、山の上にある挺身監視隊長、谷中尉」も、「若い海軍士官」である。谷中尉と同じ宿屋に泊まった翌日、間違えて谷山に来ていた補充兵六名を村上兵曹は桜島へ連れていくことになるのだが、彼らも全員「佐世保海兵団」から回天や震洋艇の修理のために派遣された海軍兵である。もちろん回天や震洋艇というのは、いずれも海軍が開発した特攻兵器である。さらに、村上兵曹が新しい勤務地の桜島で出会う吉良兵曹長も、海軍の准士官である。このように、「桜島」に登場する軍隊とはすなわち、ことごとく海軍兵なのである。にもかかわらず、「軍隊」や「兵隊」という言葉で「桜島」を論じている限り、それが「海軍」であるという事実が後景に退き、作中人物に与えられている重要な特質が捨象されてしまうのだ。

言うまでもなく、「帝国海軍」の軍人にとっての本来的な任務は、艦船に乗務することである。もちろん海軍には航空隊もあるし、陸上勤務の部隊も存在する。しかし、「海軍」

を名乗るからには、連合艦隊や支那方面艦隊などで艦船に乗務して海上防衛や海戦に臨むのが、最も中心的な任務であることは言を俟たない。にもかかわらず、村上兵曹は、坊津の港を見下ろす峠で暗号員として基地通信にあたり、転勤を命ぜられて桜島に赴いてからも丘の中腹にある壕の中にある暗号室での任務に従事するのだ。もちろんこれは、戦争が長引くにつれて「帝国海軍」の連合艦隊が壊滅状態となり、回天や震洋艇のような小型の特攻兵器を除けば、海軍兵が乗務すべき艦船がほとんどなかったという事情によるものでもある。このような状況の中で陸上勤務をせざるを得なかった村上兵曹たちは、言わば陸に上がった河童なのである。

村上兵曹がいる桜島分遣隊は、米軍が上陸してきても小銃すら満足に所持していない状態で、通信科による暗号解読作業と双眼鏡での監視以外には、軍隊としてほとんど意味のある活動をなしえない部隊である。にもかかわらず、吉良兵曹長は、桜島が「第一線」であると強弁している。

肉付きの薄い、通信科の軍人に特有の青白い皮膚をした顔の、こけた頬の上に赤く濁った眼がぎろりと私にそそがれた。陸戦の士官の持つような頑丈な軍刀に片手を支え、酒盃に伸びた手の指が何か不自然なほど長かった。

「村上兵曹か」

私は敬礼をした。

「ここは当直は辛いぞ。下士官だからといって、夜の当直を抜けることは、俺が絶対に許さん。他の基地のことは知らん。此処は少くとも第一線だ。毎日グラマンが飛んで来る。どうせ此処で、皆死ぬんだ。死ぬまで、人から嗤われたり後指をさされたりするようなことをするな」

老人のようにしゃがれた声であった。

「判っております」

「俺は、俺はな、吉良兵曹長」

村上兵曹が吉良兵曹長に初めて会った場面である。「通信科の軍人に特有の青白い皮膚をした顔」というのは、「第一線」で戦っている海軍士官にはそぐわない印象を与える特徴である。海軍の陸戦隊として「あちらこちらで戦争してきた」という吉良兵曹長は、これまでに「支那戦線」や「比律賓」での戦闘を体験してきたという。しかし今は、弾丸が飛び交う場に身を置く陸戦隊の一員ではない。もちろん連合艦隊の一員でもない。時おり上空をグラマンが通りすぎていく、

斜面に掘られた横穴に身をひそめ、陸戦からも海戦からも疎外された異形の者なのだ。

たとえば、村上兵曹が次のように洞察する場面などに、島ならぬ島である桜島において、吉良兵曹長がなぜ常人とは異なる「マニヤックな眼」の持ち主となってしまったのかが示唆されている。

志願兵の頃から、精神棒などで痛めつけられていた間、他の人間ならおそらくは胸に悲しい復讐の気持を、自ら意識せずに育てて行ったにちがいない。人間の心の奥底にある極度に非情なものを、育てて行き磨いて行き、それを自我にまで拡げて行ったに違いない。やっと兵曹長となり、一応の余裕が出来て、あたりを見廻した時、ひそかに育てて来た復讐の牙は、実は虚しいものに擬せられてあったことに気付いたに違いないのだ。彼は牙を、自分自身に突き刺すより仕方がなかったのだ。彼の奇妙な性格も、異常な動作も、そして彼にとって唯一の世界である海軍が、沖縄の戦終り、既に潰滅したことによるいらいらした心情も、おそらくは皆そこにあるのだ。

ここで最も重大な問題として語られているのは、「復讐の牙」が「実は虚しいものに擬せられてあったこと」である。ただしそこには、自分本来のあり方から疎外された状況を生きていることに対する、吉良兵曹長の苦い自覚が影を落としている。少なくとも、本来なすべき海軍兵としての任務から疎外された状況を生きていることが、吉良兵曹長の「いらいらした心情」の要因であると村上兵曹は了解している。既に潰滅した海軍の一員として「桜島」を「第一線」と見なしている吉良兵曹長の心理に、海軍士官らしからぬ海軍士官であることに対する屈折した感情を深読みすることも可能である。また、吉良兵曹長の所属する部隊が、御岳（桜島岳）によってできた島ならぬ島としての桜島にあることの中に、アイロニーを読み取ることも可能である。なぜなら、よく知られているように「帝国海軍」の巡洋戦艦の名称は、「筑波」「鞍馬」「金剛」「榛名」「比叡」など山岳名にちなんで命名される慣例があったからだ。

そのように考えると、次の場面における直接的な描写の裏側に、別の含意を読み取ることもできそうだ。

四十を越したか越さない位の、背の低い男であったが、

私はふと彼の手にした双眼鏡に目を止めた。私の不審そうな視線に、男は人なつこそうな笑いをちらりと見せて、はっきりした声で言った。

「見張りです」

そう言えば、栗の木の幹を利用して電話が設けてあり、此の草原からは湾内も大空も一望の中にあった。草いきれの中を、私はその男に近づいた。

「あいているなら、双眼鏡を貸して呉れないか」

「ええ、いいですよ。お使いなさい」

双眼鏡を受け取った。ずっしりと重かった。

多くの艦船と人命を失い、年少の志願兵や年配の補充兵を動員することで辛うじて本土防衛にあたっている海軍の現状を象徴的に示す場面である。「四十を越したか越さない位」で見張りをしているということは、三十代後半で臨時召集された補充兵だと推測できる。当時の感覚で言うと、加齢によって体力が落ちて十分な戦闘能力が期待できず、軍人としての経験もない、ただの「老兵」である。また、最後まで名前を明らかにされることもなく、「背の低い男」と呼ばれているこの見張り兵は、まるで戦艦の艦橋にいるかのように双眼鏡で空と海を監視しているということになる。艦船を失った海軍兵士が、まるで巡洋戦艦「桜島」の艦橋に立つ司令官であるかのように、山の中腹から双眼鏡で周囲を睥睨しているわけである。もちろん、陸戦においても双眼鏡は用いられるわけだが、空や海から近づいてくる敵を監視するというありようは、海戦を本分とする海軍のものである。ただし、「背の低い男」が双眼鏡を使ってしていたことは、空と海を監視するという本来の任務の遂行だけではなかった。農家の生活を盗み見て、家族間の軋轢を観察した挙げ句に孤独な老人の自殺未遂を目撃するという、任務とは無関係の、覗き見趣味に基づく卑小な行為を含んでいるのだ。(9)

このようにして、島ならぬ島という紛い物としての「桜島」の存在様態は、陸上勤務をする海軍という村上兵曹の所属部隊の紛い物性と重なり合っているのである。

四、生き残りの偽物意識

桜島に赴任する前に村上兵曹は、若い海軍士官の谷中尉から「美しく死ぬ、美しく死にたい、これは感傷に過ぎんね」という言葉を聞く。この言葉は、双眼鏡で見張りをする「背の低い男」が口にする「滅亡の美しさ」という言葉とと

もに、村上兵曹によって反芻されることで、小説「桜島」全体を通して響く主調低音のような役割を果たしている。

死ぬのは、恐くない。いや、恐くないことはない。はっきりと言えば、死ぬことは、いやだ。しかし、どの道死ななければならぬのなら、私は、納得して死にたいのだ。――このまま此の島でこのまま此の島で、此処にいる虫のような男達と一緒に、捨てられた猫のように死んで行く、それではあまりにも惨めではないか。生れて以来、幸福らしい幸福にも恵まれず、営々として一所懸命何かを積み重ねてきたのだが、それも何もかも泥土にうずめてしまう。しかしそれでいいじゃないか。それで悪いのか。私は思わず、吉良兵曹長に話しかけていた。

「吉良兵曹長。私も死ぬなら、死ぬ時だけでも美しく死のうと思います」

桜島で「捨てられた猫のように死んで行く」ことをいったんは拒絶しながら、すべてを泥土の中にうずめてしまうような死を「それでいいじゃないか」と容認した村上兵曹は、それでもなお「美しく死のうと思います」と強弁する。吉良兵曹長は「残忍な微笑」を浮かべながら、戦場で見てきた死骸の無残さを語り、「村上兵曹。美しく死にたいか。美しく、死んで行きたいのか」と「身の毛もすくむような不快（いや）な声」で嘲笑する。

これらはすべて、基本的には「私」という一人称を用いる村上兵曹の語りによって浮き彫りにされている事柄である。語っている「私」の視点は、敗戦後に置かれている。しかし、語る「私」と語られる「私」の差異を可視化するような描写は少なく、語り手の今は顕在化しない。そのために、作中で桜島に赴任する時点の村上兵曹の意識が、まるですべての出来事が終わった後の敗戦後の意識を先取りしているように感じられるところがある。言い換えれば、「美しく死にたい」という村上兵曹の「ひそやかな希願（ママ）」は、物語内容の時点においては「醜く死ぬ」という戦時中における現実の反措定であると考え得るのだが、一方では物語言説の時点における「醜く生き延びる」という敗戦後の現実の反措定としての意味をもにじませているのだ。それは言わば、島ならぬ島という紛い物としての桜島で、まともな装備のないまま陸上で本土防衛にあたる海軍の紛い物性が、敗戦後の「私」（村上）の生活をも蝕んでいるということを暗示するものなのかもし

れない。だからこそ、雑音だらけで聞き取れなかった「終戦の詔勅」の内容を、暗号室からの報告でようやく知り、吉良兵曹長とともに壕を出た村上兵曹が見たものは、夕焼けに染まった空と海であり、黄昏に貫かれた道であったのだ。もちろんそこには、落日に染められた桜島岳の「天上の美しさ」が、坂道を下るにつれ木々の間に見え隠れしているのだが、坂道を下る村上兵曹に見いだしうるものは、海軍兵曹として美しく死ぬことでもないし、美しく生きることでもない。もちろん「滅亡の美しさ」であると考えるのも、短絡的に過ぎるだろう。「私」（村上）は、次から次へとあふれる涙を掌で隠しながら黄昏の坂道を一歩一歩下っていく過去の自分を、「色んなものが入り乱れて、何が何だかはっきり判らなかった」とふり返っている。敗戦の日の出来事をこのように語る「私」の中には、依然として「美しく死にたい」という「ひそやかな希願」があり、その不可能性を感受しながら惨めな現実を生きるしかないという悲哀があると思われる。語る「私」と語られる「私」、物語言説の時間を生きる「私」と物語内容の時間を生きる「私」との差異が不分明であるのは、そのためである。小説の結びが「私はよろめきながら、坂道を一歩一歩下って行った。」という表現になっているのは、言うまでもなく、敗戦後の現実が「私」にとって「天上の美しさ」の側にはないことを示唆するものなのである。

※「桜島」の引用は、『梅崎春生全集　第一巻』（一九八四年五月・沖積舎）による。

注

（1）初出は一九四六年九月『素直』。

（2）古閑章は「梅崎春生『桜島』の周辺」（二〇〇六年十一月『芸術至上主義文芸』）の中で、中村真一郎のエッセー「坊の津＝桜島幻想」（一九七五年二月『暗泉夜話』読売新聞社）に言及しながら、「桜島は島ではない」と指摘をしている。ただし古閑の考察は、島ではないにもかかわらず「鹿児島湾上に浮かぶ孤立した島のイメージで捉えられてきたこと」を問題にしている。

（3）山本健吉「梅崎春生について」（一九五九年十月『新選現代日本文学全集28　梅崎春生集』筑摩書房）。

（4）本多秋五「作家と作品　梅崎春生」（一九七三年十二月『日本文学全集78　椎名麟三・梅崎春生集』集英社）

（5）小島信夫「梅崎春生」（一九七三年一月『新潮日本

文学41　梅崎春生集』新潮社）

（6）戸塚麻子『戦後派作家　梅崎春生』（二〇〇九年七月・論創社）「第二章　戦後」の「第一節　桜島」による。

（7）鶴岡征雄「梅崎春生『桜島』論」（二〇〇五年十一月『民主文学』）

（8）高橋啓太「不可視性と戦争―梅崎春生『桜島』」（二〇〇八年二月『文芸批評　敍説Ⅲ』）

（9）老人が首吊り自殺を図ろうとするのを双眼鏡で目撃するという話は、今まさに起ころうとしている悲劇を目撃していながら傍観するしかないという点において、テレビ映像を通して大震災のような悲劇を目撃してしまった者が心理的な負荷を与えられるという「テレヴァイズド・カタストロフ」と同じ構造を持っている。

（のなか・じゅん）

「現代文学史研究会」入会案内

1　現代文学史研究会は、主に一九二〇年代以降の日本文学に関する研究及びその普及を図り、我が国の文学研究の改善・向上に寄与することを目的として、現代文学史研究所（大久保典夫所長）が設立した団体です。この会の主な活動は、機関誌『現代文学史研究』の発行と、研究集会および合評会の開催などです。

2　機関誌『現代文学史研究』は、年二回刊（六月・十二月）で、研究論文・文芸批評・エッセイ等を掲載します。

3　入会申込に際しては、所定の用紙に必要事項を記入して郵送するか、電子メールでご連絡下さい。申込書が必要な方は、事務局までご連絡下さい。書類一式をお送り致します。

4　電子メールで申込む場合は、入会の意志を明記し、住所・氏名・電話番号・所属・メールアドレスを記入して送信して下さい。

5　入会には、事務局（事務局長・野中）で申込が受理され、所長（大久保典夫）の承認を得ることが必要です。

現代文学史研究所事務局
〒215-0027　川崎市麻生区岡上一二五―四
電話＆FAX　〇四四（九八六）三七六〇
e-mail:gendaibungakushi@yahoo.co.jp
振替　〇〇二八〇―〇―九二七二八